2015年度春期　オランダ研修レポート
研修期間　3/22（日）～3/27（金）

岡　村　優　努*

私は、子どもたちが自分のやりたいことを見つけ、知りたいことを学び、自ら考え、可能性を引き出せる社会を創ることを目指している。そのためにアクティブラーニングやコーチングを中心とした教育のあり方を探究している。

ある日の教育セミナーで私は、オランダの教育では根っこの部分に上記のセンスがあるということを耳にする。オランダでは法律によって教育の3つの自由が保障されているという。それは【設立の自由】【理念の自由】【教育方法の自由】である。つまり、オランダは一定の基準を満たせば誰でも、どんな宗教のような理念でも、教材など教育方法は問わず学校を設立でき、国がその手助けするのだ。その中で、子どもは自分に合った学校を選び、学ぶのだという。

私は、そんな社会を日本においても実現したいと思い、その実態に触れるべく、日本イエナプラン教育協会主催[1)]のオランダイエナプラン教育研修に参加した。

イエナプランとは、教育のあり方のひとつである。イエナプランは「全ての人間はユニークであり、子どもの全人格の発達を意図した教育を目指す」という「子ども中心主義」を謳っている。子どもの可能性を伸ばすために、子どもたちが学び合い、遊び合い、話し合える場を用意することが学校の役割だと考えているのだ。

この研修の目的は、オランダにおけるイエナプランのあり方、理念を学び、実際に学校に赴いてどう生かされているかを見て、教育そのものがどうあるべきかを問い直すことであった。

その目的のもと、現職の教員をはじめ、大学教授、企業の研修担当員、教育に関係する大学生、院生といった面々が集まった。それぞれの立場から、話し合い、気づき合い、イエナプランを通して教育のあり方を考えていくこととなった。

今回のオランダ研修での6日間のスケジュールは次のようなものであった。

- 3/22　挨拶、ウェルカムディナー
- 3/23　イエナプランの理論と歴史
- 3/24　イエナプラン小学校見学
- 3/25　ワールドオリエンテーション
- 3/26　ストーリーラインアプローチ
- 3/27 イエナプラン小、中学校見学

---

*教育学部3回生

1）「日本イエナプラン教育協会」とは、「日本におけるイエナプラン教育の発展・普及のために、市民の自発的な教育活動を支援、促進し、情報交換や研究を深めていく場を作ることを目的とする団体です」（日本イエナプラン教育協会HP）。イエナプラン教育は「ドイツで始まりオランダで広がった、一人一人を尊重しながら自律と共生を学ぶオープンモデルの教育です」（同上）。

［3/22（日）挨拶、ウェルカムディナー］

初日はスキポール空港にて集合、そこからバスで研修場の Het Bovenveen に向かう。到着後にウェルカムディナー、食事の場も意見交換と学びの宝庫。

のち宿舎に入り、部屋割りのあと明日に向けて就寝。

［3/23（月）イエナプランの理論と歴史］

研修初日

研修所にてイエナプランの理論と歴史や、コアクオリティについて Hubert さんから説明を受け、自分たちでイエナプランにおける活動を実践してみる。

研修第 1 回目は、「イエナプラン」というワードを中心にマインドマップを作り、自分の長所や短所、得意なことや伸ばしたいことを自己分析した。それを見せ合うことで、お互いのあり方や目標といったものを知りあうことができ、これが自己紹介にもなった。

イエナプランの理論として重要視されていることは、**イエナプラン教育は「子ども主義」であり、子どもの全人格的発達を意図しているということ**である。すべての人間はユニークな存在であり、子どもが自分で学ぶ力をつけ、先生はその可能性を広げる手助けをする立場に立つ。子どもが学びやすい環境を作ることが教育機関の役目であるという考え方である。**「子どもは何が好きで、何が得意なのか、何を伸ばそうとしているのか」を先生は把握することが重要なのだ。**

対する主義として挙げられたのは教科主義であり、これは先生から学ぶことを中心とした主義であるという。子どもは常に他者からの評価にさらされ、テストによって「自分は何ができないか」を探す減点方式の教育である。

昼休憩のときに散歩を提案される。座ってばかりではなく、歩くことで頭をリフレッシュする。

Hubert さんがパワーポイントを使って説明。研修会場は机を向い合せて、お互いが見えるように設置されていた。イエナプランの実践である。

子どもは12歳の時点で±7歳ほどの成長差が生まれるうえ、学びたいことは人それぞれ違うとされているにも関わらず、**同じ教育、同じ知識を同じタイミングで入れることに、イエナプランは疑問を呈したのだ。**

昼食後、研修2回目。ハワード・ガードナー博士によるMI理論（Multiple Intelligences）を用いて、それぞれの才能や得意分野、好きな分野を8つの中から見つける。

MI理論とは……多重知能理論。人間は複数の分野における知能があるという考え。それを8つの分野に分けて個人の知能のバランスを見ることで、自分の才能を包括的に捉える。

今回の研修で行われたテストでは下記の8つの知能のスコアを取った。

・空間的インテリジェンス……物事をイメージする能力
・身体的インテリジェンス……行動や接触に関する能力
・言語的インテリジェンス……言語を扱う能力
・数学的インテリジェンス……数学、論理を扱う能力
・内省的インテリジェンス……哲学、考慮する能力
・社会的インテリジェンス……他者と関わる能力
・音楽的インテリジェンス……歌など音楽に関する能力
・自然派的インテリジェンス……自然界の事象に関する能力

これを参考に、それぞれ異なる知能を持つ人が集まるように3〜4人のグループに分かれた。
イエナプランでは「学校とは社会の縮図であるべきだ」という考えがあり、それに基づいて場に「異」を集めるということが望まれている。

今回はそれぞれのグループごとに課題が与えられた。それが「10週間、午後の授業を使って、子どもたちのそれぞれの才能を生かせる授業を考える」というものだった。それぞれの考えた授業をプレゼンテーションし、それに対する質問、フィードバックをすることで、自分たちも実際にイエナプランを体験した。

プレゼン風景。この時点でそれぞれの才能が生かされていた。最後のHubertさんの「先生の私が何もしなくても、授業ができました」が印象的。

[3/24（火）イエナプラン小学校見学]

研修 2 日目

二手に分かれて小学校を見学。自分のグループは「Veendam In de manne」へ。

オランダでは教育の 3 つの自由（設立、理念、教育方法の自由）に基づいて、私立、公立に関係なく市が校舎を提供する。そして国が、学校が掲げた教育プランに沿っているか視察する。

この学校は以前、国からの視察によって「子どもが理念に沿った学びを得られていない」とされ、2008 年に立て直しの対策が取られたという。校長が変わってからは、ICT 教育と人材に積極的に投資が向けられ、生徒数が増加。それに伴って市が新校舎を提供することになったほど健全な成長を続けているという。

この小学校もイエナプランに基づいてマルチエイジグループでクラスが構成され、1、2 年生（4〜5、6 歳にあたる）からなる小学年クラス。3〜5 年生（7〜9 歳）からなる中学年クラス。6〜8 年生（10〜12 歳）からなる高学年クラスに分かれていた。

最初に自分が入ったのは中学年グループで、ワールドオリエンテーションとして生徒がそれぞれ自分の課題と向き合っていた。お互いの存在を確認しながら、時に一人で、時に話し合いながら学ぶ様子を見て、イエナプランは「一緒の勉強をする」ことではなく、「一緒に勉強する」ことを重要視しているのだと改めて感じた。

ワールドオリエンテーションのあとはイスを円形に並べてフルーツランチタイムと称する時間に。（サークル対話であるのかも知れないが）

先生の意図としては**「普段の勉強ではお互いの顔を見ない分、こういった時間を用意することでお互いを見合う時間、聞きあう時間を持つようにしている」**のだという。やはり、クラスの仲間の存在を意識することが学級経営において重要視されていることなのだろう。

ワールドオリエンテーションの風景。各々の課題に向き合っている。奥にはパソコン室、階段の上には一人になれる空間。
見切れているが写真の左部に電子黒板もある。
サークル対話の際は中央の机の周りにイスを集める。

中学年の後は小学年のクラス。文字を読めない児童が多いため、絵を用いて文字を学ぶことから始める教材が多かった。オランダでは移民の子どもでも関係なく、子どもを学校に通わせる義務を持つため、短

期間でオランダ語をマスターさせるシステムが整っているのだという。

小学年のクラスではサークル対話を通して、児童の一人が特定の誰か（今回は母）に向けて手紙を書くのをクラスのみんなで手伝うという授業を行っていた。

協力して文章を作成することで作文力、伝える力、単語など、文字言語の基礎を学ぶのだという。この際先生は「何を書きたいか」を作成担当の児童に聞き、児童はそれを考えて先生に伝えていた。先生が「他にいい表現はないかな」と他の児童に聞き、推敲していくという形式で進められていた。

授業はあくまで子どもが主体で行われる。学年が上がるにつれて先生が手助けをする機会が減っていき、子どもが本当の意味で「自立」した思考を持つようになるのだろう。

作成した手紙はすぐにプリントアウトされて教室の後ろに飾られた。そこには今まで児童が作った手紙をはじめとする作品が飾られており、教室を児童生徒がデザインしていた。

低学年のサークル対話。先生はゆっくりと、静かに話し、児童は先生やお互いの声に耳を傾けていた。イエナプランは「静かな学校」と言われる所以がそこに感じられる。

まだ文字が読めない子どもにもわかりやすいようにイラストで表現。教材も先生が独自に作成できる。

高学年クラスではワールドオリエンテーションの後、サークル対話が行われた。

このぐらいの歳になると個人の心身の成長差が大きく表れるようになり、まさに「異」を集めた場となっている。また、他の学年のクラスはこちらに関わることに照れが生じて、こちら側の問いかけに対応するという形が多かったのに対し、このクラスは積極的に話しかけてくる生徒が度々見られた。

そのあとは低学年と高学年が近くの体育館まで移動し、低学年はマット、ロープなどを用いた器械運動。高学年はダンスの授業を行った。ダンスは専門の先生が来て音楽に合わせて繰り返し真似をするように指導していた。どこまでできたかは自己評価制で、先生は動きを細部まで揃えようとはせず、それぞれの感性に任せて体運びをするように生徒に任せていた。

高学年のサークル対話。オランダ語がわからないため内容は不明だが、ここもまた他者の話を静かに聞き、意見がある生徒は誰もが手を挙げていた。

お昼休憩。
イエナプランでは「遊ぶ」ことも教育として重要視している。
写真は校庭のタイルにチョークで落書き、それを通して言語交流。

［3/25（金）ワールドオリエンテーション］

研修 3 日目

研修所のイスを円形に並べ、何も持たずに座るよう指示された。すると、Freek さんが紙袋からおもむろに「何か」を取り出した。

「瓦？」「瓦ですか？」「割れている」という声が聞こえると、Freek さんはそれを隣の人に回した。その人が瓦を手に持ち、少しすると「重さはどれぐらいだと思いますか？」と Freek さん。
「10 kg ぐらいだと思います」と答えると、またそれを隣に回す。

瓦から手を離した瞬間、その人が手を掃うのを Freek さんが見つけて「なぜその動作をしたのですか？」と聞いた。「ざらざらしていたから、砂がついたと思って」と理由を述べる参加者。

そのように瓦を回していくうちに、瓦に対する疑問や、それを調べる視点が次々と挙がり、30 分以上かけて瓦が分析された。

一周まわり、Freek さんが瓦について皆が出した疑問の答えを発表、かかった時間は 1 分。

Freek さんは「この瓦についての疑問は 1 分で解消できました。さて、皆さんは今の時間は楽しかったですか？　ただ教えられるより良い時間になりましたか？」と僕らに投げかけた。

調べれば一瞬で答えが出ることであっても「疑問」を持つ、皆でそれを解決する方法を考えるということに意義があるのだという。

最も良い教師とは、多くの答えを知っている教師ではなく、多くの疑問を持つ教師なのだと、Freek さんは言った。

個人的な感想としては、この状況を非常に楽しんだ。答えが近くにあるようで、それでいて届かないというもどかしさが「知りたい」「わかりたい」という好奇心を湧きあがらせた。最初から答えを「教えら

れる」よりも、疑問を持った上で答えを「探究する」方が、より頭に残ったのだ。

瓦を回すシーン。
最初は様子を見て黙っていた周囲の人も、中盤からは口々に疑問を投げかけるようになった。

そのあとの Freek さんからの説明で「イエナプランが言う『自由』とは、子どもに『好きなことを何でもやらせればいい』という意味ではない。それは放任であって、責任を放棄しているだけだ」という言葉があった。

ある程度決められた枠を作り、その中での自由を子どもに提供することで、子どもは安心し、伸び伸びと学べるのだという。この「安心」が、子どもが学ぶ環境において非常に重要なのだという。何かに抑圧され、強制され、恐怖から行われる行為は創造性を破壊する。子どもが主体的に、力強く活動するために安心できる環境が必要なのだという。

大人になり、失敗を恐れ、多様性をなくしていく社会に対しても、イエナプランは疑問を投げかけているのだ。

自由とは。
Freek さんは掌にペンを乗せ、「ここから子どもが飛び立てる環境にすることだ」という。

Freek さんの先生であった Tom さんも急遽参加。
コミュニケーションとは何かについて学ぶ。

その後は、オランダでイエナプラン校の教師を目指している教育実習生の方々と交流。
実習生から、学校での取り組みをプレゼンテーションしてもらった。

そこではプレゼンテーションの映像を子どもたちだけで作った姿や、ストーリーラインアプローチを用いた学び、メディエイターとしてケンカの仲裁を行う子どもたちの映像がスクリーンに映し出された。

実習生への質問時間においては、イエナプラン校の先生を目指す理由として**「40 年前のイエナプランの授業が今でも心に残っているということが、イエナプランの良さを証明しているからです」**と力強い回答が出てきた。**「子どもと人間として接することができるから」**という回答にも大切な思いが込められているように感じた。

逆に日本の教育への質問として「なぜ男子校、女子校なるものがあるのか」「なぜ制服があるのか」といった質問が出され、言葉に詰まったことが頭に残っている。

それらの制度は、自分たちの生活になじみすぎていて、「なぜ存在するのか」「どのような意図があるのか」ということに疑問を持つことが少なかった。イエナプランだけでなく、オランダ全体の教育思想として、学校はある程度の安全を保障された社会の縮図であるべきで、同性だけや制服だけで過ごす環境が社会の姿ではないことを知っている。日本の教育は、社会の練習として機能しているのか、「問い」が生まれた瞬間だった。

実習生のプレゼンテーション。
実習生も自分に合う教育方針の学校を探して、そのプランの先生になれるように勉強する。

実習生への質問。
実習生に向けられる質問に今まで当たり前だったことが覆されていく。

[3/26（木）ストーリーラインアプローチ]

研修 4 日目

前日に宿題として出されていた「雨」についての疑問を共有した。

「もっとも大きな雨粒はどれほどの大きさか」「なぜ雨粒は一つにまとまらないのか」「雨が降ることを自分で予測できるか」といった疑問が 20 以上共有された。

「私たちは『雨』を通してでも哲学、科学、言語、歴史、感情、あらゆることについて学び、共有できる」と Freek さんは言った。

先生自身が答えのない問いでも問い続けることで、「考える」「疑問を持つ」ことが間違いではないと生徒たちは安心できる。そして問いは問いを生み、子どもたちは自分から湧き出た問いを深めるため、アクティブに動くのだという。

「教育は答えに関わるものではなく、問いに関わるものである」という Freek さんの言葉が印象に残っている。

その後は、ストーリーラインアプローチを行った。これは、先生が物語の節目として人物像など（枠組み）を考え、その間（外見など）を子どもたちが組み立て、学びにつなげるという取り組みである。現実に限りなく近いフィクションが、話しやすい場やクラスの課題を解決するヒントになるのだという。

もちろん、現実に近いが故のリスクもあり、先生はそれを考慮したうえで子どもたちの声を聴くことが重要となってくる。

「雨」のような身近なものに疑問を持つことで、自分を取り巻く「当たり前」を問うことの大切さも学ぶことのかもしれない。

ストーリーラインアプローチ。
できた作品は教室に飾る。子どもたちは自分たちが作った世界と共に日々を過ごす。

ストーリーラインアプローチのあとは Celebrate と称する研修修了書授与式を行った。
Celebrate もイエナプランの取り組みのひとつで、先生が提示したテーマに合わせてお互いの成果や努力を祝うというものである。

例えば「オペラ」というテーマであったとき、対象のグループはオリジナルのオペラを通して研修の日々を表現した。他にも「生きた絵」や「人形劇」「歌」など様々なテーマを通して、クリエイティブにお互いの健闘を讃え合った。

この Celebrate を通しても個人の才能が生かされることになる。30 分で作るように言われたときは「それは無理だろう」と思った。しかし、メンバーが知恵を出し合うと、すぐに方針は固まった。

与えられた課題を、自分が得意な分野と仲間が得意な分野を合わせて乗り越えていくのだ。「異を共にする」ことによって生まれる創造的な取り組みが、社会に出ても生きていくのだろう。

ボノの色帽子。
それぞれの色に思考パターンが定められており、かぶる帽子を変えることで物事を多角的に捉える練習をする。

Celebrate の様子。
グループごとの創造的な表現に会場も大いに盛り上がった。
祝福は先生から送られるものだけではなく、仲間たちと作り上げていくものなのかもしれない。

[3/27（金）イエナプラン小、中学校見学]

研修最終日

小学校と中学校に分かれて見学に向かった。自分は中学校である「schoolbezoek JenaXL」を見学した。

今回は校内案内委員という役職に属している 2 人の学生が案内、説明をしてくれた。学校の見学者に対しても先生ではなく生徒が対応することからも、子どもの自主性を尊重、信頼する学校の姿がうかがえる。

最初に連れられた場所は、ファミリールームという部屋だった。この部屋は生徒が学校に来て最初に訪れる部屋である。この部屋のメンバーは異年齢で構成されており、授業の合間に勉強を教え合うことや、サークル対話をする場として機能している。

朝はこのファミリールームでサークル対話をすることから始まる。テーマは「読書」「ニュース」「芸術、哲学」「趣味、熱情」の 4 つの時事内容をローテーションで回しているらしい。

ファミリーメンバーは何が得意で、今何に興味を持っているのか、何を見てどう考えているのかを知り合い、かつ自分も表現することでファミリーメンバーと「ひとりの人間」として存在を共有するということなのだろう。

JenaXL ではイエナプランにおける「全人格的発達」「異を共にする」「子どもの多様な才能が生かせる場を用意する」ことを重要視していることがここからもうかがえる。

授業は学年ごとに分かれ、日本の大学のように教科ごとのクラスへ移動する形式が取られていた。授業も生徒の多様な才能が生かされるように展開することが望まれている。全ての授業がサークル対話で始まり、今回学ぶことについて先生と生徒で問いを集めて、深めるのだという。

例えば今回見学した数学の授業では「二次関数と一次関数が交わる点は何を意味しているか」をクラスで話し合っていた。問題の解き方と、その証明方法を考えていたのだ。

JenaXL では授業時間は 30 分と定められていて、今回の授業で先生が問題の解き方を解説するような場面は見られなかった。

この学校では、**教科書内容やわからない問題は自分で考え、解決する方法を編み出すことが望まれていて**、生徒はファミリールームで他の生徒に質問することや、先生に直接聞きにいくことで問題の解決を図る。

この際注意しておきたいのは、先生は生徒の自主性に任せるのであって、ほったらかしにならないようにすることが重要だということである。授業後、チャイムが鳴るまで教室にいることや、職員室にいる旨を伝えることで、**生徒に対して常にオープンでいること。自身を解決法の選択肢のひとつとして提示することで、生徒に枠組みのある安全な自由を与えているのだという。**

枠組みのある安全な自由は責任を伴う。イエナプランにおいては子どもが選択の自由に対して責任を持つ重要性も学ぶのである。

イエナプラン中学校である JenaXL では、今までの小学校とは異なって 1 年の最後に期末テストがあり、そこで 60% 以下の点数を取ると留年するという制度が存在する。

イエナプランが教育の問題として抱えていたことに、年度末に生徒が一定水準の成果を出せずに留年者が多発したというものがあった。

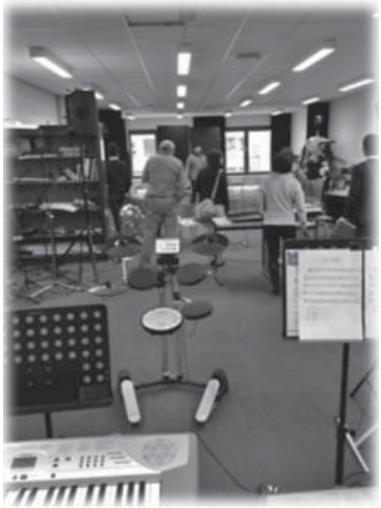
イエナプラン小学校はその対策として年度末ではなく、8 年間（入学から卒業まで）をかけて国が定める一定の学力水準まで持っていくという規定に変更した。これによって成長度合いが様々な子どもたちが

数学の授業風景。教室が足りないため技術室で行われた。
生徒に「イエナプランと他の学校の違いは？」と聞くと、「自分で授業を計画することと、サークル対話があること」と答えた。

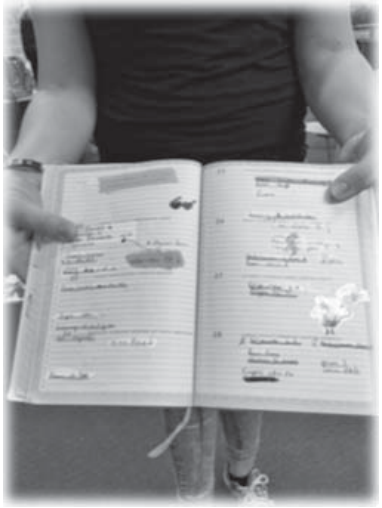
JenaXL の職員室。
サークル対話のような席配置になっていて、先生間のコミュニケーションがはかどっている。日本の職員室とどのような違いがあるだろうか。

個々のタイミングで学業と向き合うことになり、留年問題は解決の方向に向かったという。

では、このイエナプラン中学校の生徒は、期末テストに対してストレスを抱えているのだろうか、試験方式は？　どのように評価するのか、といった疑問が生まれた。



音楽室。
ここでもサークル対話ができるようにイスが並べられていた。奥には衣装や本格的な照明もあり、総合的な音楽を意味する部屋であるように感じた。



一週間の授業予定を書いた手帳。生徒は毎週水曜日に一週間の授業計画を立てる。
「案内している間に出てない授業はどうするの？」と聞くと、「後で先生に聞けば大丈夫」とサラリと答えられた。

理科の時間。
ここでも生徒が各々の課題に向き合っている。インターネットや SNS の利用に関してもある程度の規準が設けられているが、基本的に自由と責任は生徒にある。

学生掲示板。
生徒個人がサークル活動を企画して貼りだす。
勉強会や運動サークルなど、内容は多岐にわたる。

校舎の玄関に飾られていた絵。
子どもの多彩な才能を教育に活かすことを表している。

中学校の後は、もうひとつのグループがいる小学校「Schoolbezoek‘t Hoge Land」に合流した。

昼食の後校内を回り、学校ごとに教室の配置や特徴が様々であることを改めて感じた。

ここでの授業の一環で話題に上がった中に、学校における政治教育の話が合った。オランダは教育方法の自由の観点から、政治をどう見るかを授業に取り入れることができるのだという。

この学校の低学年のクラスでも、先生が生徒と政治をどう見るか考え、意見を交換するというものがあった。インターネットでも、子どもが今の政治方針や政党が何を目的としているかをわかりやすく理解できるようなサイトがあり、それを授業で扱うこともあるのだという。

政治は国を豊かにするものであり、選挙権を得たときに政治に深い関心を持って接する大人を育てることが必要である。だからこそ、シチズンシップ教育もイエナプランにおいて重要視され、取り組まれてい

小学校のポートフォリオ。
自分が気に入った授業をファイリングする。
できたポートフォリオは思い出として何年でも残る。

低学年クラス。
教室が児童の作品で彩られている。
勉強空間がカラフルだと集中できないのではと思っていたが、ここにおいてはあまり関係なさそうだ。

るのだろう。

この学校の見学を最後に、計6日間のイエナプラン研修は幕を下ろした。

校内の図書室。
最近はインターネットもあるためか、日本の図書室と比べると小規模。
学校が必要な本を国に毎年申請し、本を入れ替えていく。

職員室の近くにあった機械解体スペース。使わなくなった機械の部品を置いておくと、子どもたちがハンマーやドライバーなどを駆使してそれらを解体していく。機械の中身に自分も興味津々。

日本への質問タイム。
日本の朝食はライスなのか、体育の授業では何をするのかといった質問があった。この間も自分の作業に集中したい子は部屋の端や二階に移動し、個人の空間を確保できるように配慮されていた。

まとめと考察、感想

初めての海外、オランダが見せてくれた教育は、日本のものとは大きく異なるものでした。他者という違いと並んではじめて自分の姿に気づくように、オランダの学校や教育に対するあり方を肌で感じることで、日本の教育の特徴、そのあり方の一面が見えた気がしました。

イエナプランが柔軟に他国の文化を取り入れ、教育に活かすように、日本の教育が他国の方法論や文化を柔軟に取り入れるのは難しいかもしれま

せん。そもそも、国の規模や歴史、文化、目指す教育像も異なるオランダの教育方法を日本に取り入れても、適切に機能するかは疑問の残るところです。しかし、イエナプランの考える「教育は子どものためにある」という根源的な思想や、当たり前を問うことの重要性、多様な才能を発揮できる環境を守ることは、どの世界においても大切にされるべき価値観なのではないでしょうか。

では、日本の教育にはその価値観がないのかというと、恐らくそうではありません。自分たちはそれを言葉やカタチとして認識していないだけで、根っこには人間として子どもたちと関わる大切さを知っています。ただ、受験や家庭問題など、子どもを取り巻く環境があまりにも目まぐるしいために、「何のために学ぶのか」を見失ってしまっているだけなのではないでしょうか。

少し視点を変えてみれば、子どもたちがイキイキと学び、大人と共に創造的でパワフルな活動をする社会の実現は、そう遠くないのではないか。そう思えた6日間でした。

謝辞

最後になりましたが、これだけ多くの学びや気づきがあったのは、この場を用意してくださったFreek Velthausz さんや Hubert Winters さん、リヒテルズ直子さんをはじめ、この研修を共に過ごしたメンバーとの対話や触発があったからであると痛感しております。ご協力くださったオランダの学校の関係者の方々、研修場を快適に過ごせるようにサポートしてくださった方々、レポートの編集に助言をくださった大槻美智子教授、すべてのご縁に、改めて心から感謝の言葉を送らせていただきます。本当にありがとうございました。

これからもこの研修を通して気づいた課題や学びを深め、より良い教育とは何かを探究し、実践していく所存です。

拙い文章ではありますが、このレポートが少しでも「問い」と「学び」を生み出したのなら幸いです。最後までお読みいただき、ありがとうございました。

2015年4月15日　岡村優努